



支援便り

令和6年12月発行 第3号
串木野特別支援学校支援部

巡回相談に行かせていただくと、子供たち全員が生き生きと学んでいる感動する授業に出会うことがたくさんあります。そのような授業で共通しているのは、子供たち一人一人が「やるべきことが分かり、やってみようと思えている」ことです。活動そのものが明確で、どの子も参加しやすい仕掛けがあるなど、様々な工夫あつてのことですが、「子供たち一人一人に確実に指示が届いている」という点も共通していると感じます。

一方、巡回相談で多い相談のひとつが、「指示を聞いていないことが多く困っているんです。」というものです。先生方も困っていますが、指示が届いていない子供たちも「やるべきことが分からずに困っている」ことがほとんどです。先生方が困っているときは、大抵の場合、子供たちも困っています。

巡回相談では、指示が聞けない背景（なぜ）から、個に応じた支援を担任の先生方と一緒に考えますが、ここでは当たり前すぎて忘れがちな「**きほん**」の3ステップを確認します。

「指示の届け方」ひとつ、教師が意識するだけでも、子供たちが安心して学べるかもしれません。

指示を届ける



ステップ1 「**き**く準備、子供たちにできている？」

子供の注意を向けてから話します。「今から大事な話をするよ」と伝えても、すぐに話し始めるのでは効果が薄いです。本当に大切なことの前には「間」をとり、聞く準備ができてから、子供の顔を見て話します。板書しながら歩きながら話すのは避けましょう。注意集中が難しい子供には、肩にそっと触れるなどして個別に注意を促す配慮も必要です。

ステップ2 「**ほ**んとに必要？その言葉」

短く具体的に伝えます。教師はつい話しすぎる傾向があるようです。話が長くなるほど要点が伝わりにくく、集中が切れやすくなります。大切なことほど、肯定的な表現で短く具体的に伝えましょう。子供にもよりますが、表情やジェスチャーなど、ノンバーバルな伝え方も集中を高める効果があります。

ステップ3 「**ん**?ちゃんと届いてる？」

指示が届いているか確認します。指示後の子供の表情や行動をよく見ることで、指示が届いているかを見届けましょう。指示が届いていなければ、再度伝えます。それでも伝わらないときは、指示の内容や伝え方を見直します。原因が子供にあると考えると解決策は見つかりにくいです。「どうすれば伝わるか」できる支援を考えます。

子供に響く伝え方



雨の日の廊下を元気に走る子供たち。今にも滑りそうです。思わず「廊下は歩くよ」と言った私。でも夢中で走る子供たちには響きません。

すると隣を歩いていた先生が、ゆっくりと張りのある声で「だ・る・ま・さ・ん・が・・・・」と言いました。子供たちはその声に合わせて、一步一步ゆっくりと足を出します。

危険を回避した子供たちは、楽しそうに廊下を歩いていきました。場に応じた子供に響く伝え方について考えさせられ、勉強になった出来事でした。

子供に響く伝え方は、きっとあります(*^o^*)

増え続ける発達障害？

発達障害とされる子供は13年で約10倍。本当でしょうか。

『「発達障害」と間違われる子供たち 成田 奈緒子 著』の中では、生活リズムの乱れにより、脳の成長バランスが崩れ、「発達障害のような」状態が見られる子供たちが相当数いるのではないかと書かれています。気になる子供がいたら、その子の生活リズムや環境を調べ、まずは生活リズムを整えることも大切かもしれません。